

## UISS 料理法

コンサルティング部 部長 井上 実

6月20日にUISS（情報システムユーザースキル標準）Ver1.1がリリースされ、今年度末までには、UISSの研修ロードマップも公表されるという。そこで、UISSを効果的に企業の情報システム部門で活用するためには、UISSをどう料理すべきかポイントを整理してみる。

### 1. UISS Ver1.1の概要

昨年6月にリリースされたUISSの新バージョンVer1.1がリリースされた。大きな変更はないが、次の点が明示されるとともに、活用を促進するための有効活用ガイドもリリースされた（詳細資料は、経済産業省のHPからダウンロード可能 [http://www.meti.go.jp/policy/it\\_policy/jinzai/index.html#02](http://www.meti.go.jp/policy/it_policy/jinzai/index.html#02)）。

#### ISスキルレベルの評価方法

機能・役割定義の中項目に対して、4レベル（レベル1：指導の下でできる、レベル2：一定程度であれば独力できる、レベル3：全て独力でできる、レベル4：指導できる）で評価し、該当の中項目がすべてレベル4以上であれば大項目がレベル4、レベル3以上であれば大項目がレベル3というように評価する。

#### 研修ロードマップ

機能役割定義の各タスクに必要な研修を「入門レベル」、「基礎レベル」、「上級レベル1」、「上級レベル2」の4レベルに分け体系化する。今年度末までには、公表される予定。

#### キャリアレベル概念

人材像ごとに設定された7レベルは、業務の貢献範囲（担当業務レベル、プロジェクトレベル、事業・企業・企業グループレベル）、認知度（社内で認知される、社内外で認知される、社内外で目標とされる）、要求作業の達成（ISスキルレベルと同様な4レベル）によりレベルを判定する。

ISスキルおよびキャリアレベルの判定方法が明確になり、研修ロードマップも近々リリースされることから、UISSを本格的に活用することが可能になった。

### 2. UISSの目的

UISSを活用する際に、まず、確認しておかなければならないのは、UISSが策定された目的である。策定目的から外れた活用は、決して良い結果を導かない。

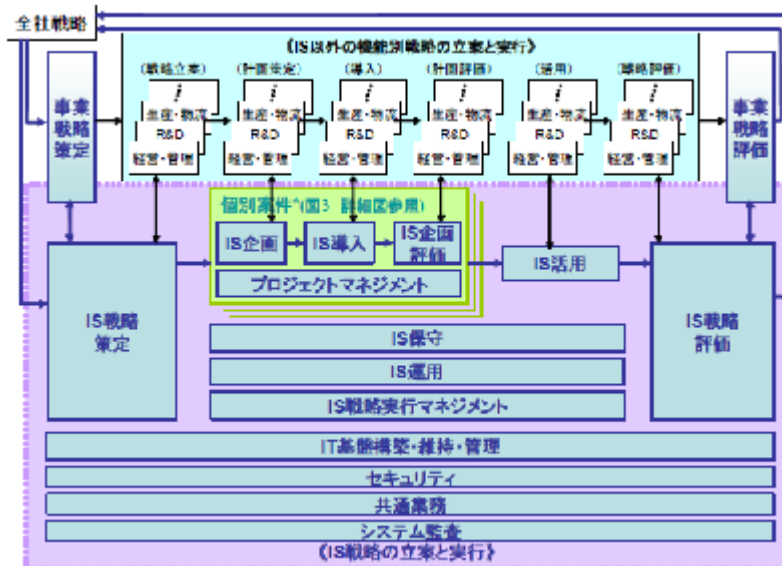
UISSの目的は、「各企業が自社に必要なIS機能の全体像の可視化を実現する」とこと、「ISに携わる人材の最適な配置と育成を実現する」とことの二つである。この二つの目的に沿ってUISSを活用する必要がある。

では、これらの目的に沿って活用するためのUISS料理を紹介する。

### 3 . UISS 料理その 1

UISS の第 1 の目的に沿った料理は次のとおりだ。まず、UISS のタスクフレームワーク（図表 1 参照）を活用して、自社における情報システムの位置付けを見直す。経営戦略や事業戦略との関連、IS 戦略の存在など、タスクフレームワークをテンプレートあるいはあるべき姿として活用することで、自社内における情報システムの位置付けを容易に見直し、必要なタスクを抽出することが可能となる。

(図表1)タスクフレームワーク



【出典】経済産業省、「情報システムユーザースキル標準 Ver.1.1」、2007年6月、p11

次に、自社内の情報システムを担うために必要な機能・役割を定義する。タスクフレームワークから抽出された自社の情報システムに必要なタスクの内容（大項目）を、UISS の機能・役割定義（図表 2 参照）を活用して、より詳細に検討する。UISS の機能役割の中項目、小項目の内容から自社の必要な部分を選択し、不足する部分は補うことにより、自社に必要な IS 機能の全体を定義することができ、自社の IS 機能の全体像を可視化することが可能となる。

(図表2)機能・役割定義

番号	大項目 (95%)	IS 種別		スキル	知識項目
		中項目	小項目		
2	IS 業務関連	対象領域のビジネス および環境分析	対象領域のビジネス のビジネスレベル での理解	ビジネスモデルをビジネスプロセスのレベルで正確に捉える ことができる ビジネスの全体像を机上でシミュレーションでモデル化し、働くことが できる 内部組織を正確に捉えることができる 組織上の課題を分析・抽出し、支援することができる 業界内における新顔面と競争面を評価し、文書化できる	ビジネスプロセス ビジネスプロセス分析・表記 手法 ベンチマーク 内部組織の調査・分析手法 企業の一層の業務改善 経営管理業務・手法 業態分析手法 ベンチマーク
			情報システム (AIS)の調査・分 析	現行情報システムの目的、機能、アーキテクチャ、規模、能 力、コスト、保守運用および障害状況と正確に捉えることが できる 現状および近い将来に起こりうる情報システムの課題を特 別に捉え文書化できる 業界内における最新技術水準を把握できる	情報システム調査・分析手 法 情報システム評価手法
			情報システム動向の 調査・分析	情報技術動向を組織的かつ総合的に捉えることができる 経営・情報戦略に活用できる IT 利用方法を適切に分析・ 抽出し、文書化できる 情報を継続的に収集できる	IT 動向 IT 動向調査手法
		IS 機能の定義	情報システム基盤 の構築 (Table) の位置	IS 構築実現に必要な下記システム調査をモデル化し、働く ことができる - デザインシステム - ネットワーク - 基盤システム - IT セキュリティ - システム管理 - アプリケーション構築 - インフラフェーズ	アーキテクチャモデル EA

【出典】経済産業省、「情報システムユーザースキル標準 Ver.1.1」、2007年6月、p17

自社版タスクフレームワークと機能・役割定義が UISS 料理の一皿目である。

#### 4 . UISS 料理その 2

UISS 料理の二皿目は、自社版機能・役割定義を担う人材像を定義し、育成するためのロードマップを作成することで、IS に携わる人材の最適な配置と育成を実現することである。

まず、定義した機能・役割と UISS の人材像とタスクの関連 (図表 3、4 参照) から、該当する人材像を選択し、人材像定義をテンプレートに自社の人材像を検討すればよいように思われる。しかし、そうではないようだ。

(図表3) キャリアフレームワーク

キャリアレベル	人財像	ビジネスストラテジスト	ISストラテジスト	プログラママネージャ	プロジェクトマネージャ	ISアナリスト	アプリケーションデザイナー	システムデザイナー	ISオペレーション	ISアドミニストレータ	ISアーキテクト	ISアーキテクト	ISアドミニストレータ	ISオペレーション	システムデザイナー	アプリケーションデザイナー	プログラママネージャ	プロジェクトマネージャ	ISストラテジスト	ビジネスストラテジスト	
		ハイ	7																		
ミドル	6																				
	5																				
エントリー	4																				
	3																				
	2																				
	1																				

【出典】経済産業省、「情報システムユーザースキル標準Ver.1.1」、2007年6月、p37

(図表4) 人材像とタスクの関連

タスク	人財像	ビジネスストラテジスト	ISストラテジスト	プログラママネージャ	プロジェクトマネージャ	ISアナリスト	アプリケーションデザイナー	システムデザイナー	ISオペレーション	ISアドミニストレータ	ISアーキテクト
		事業戦略策定		■							
IS戦略策定		■									
IS戦略実行マネジメント				■							
プロジェクトマネジメント				■							
IS企画					■						
IS導入(アプリケーションコンポーネント)						■					
IS導入(システムコンポーネント)							■				
IS企画評価					■						
IS保守(アプリケーションコンポーネント)							■				
IS保守(システムコンポーネント)								■			
IS運用									■		
IS運用										■	
IS戦略評価		■									
事業戦略評価		■									
IT基盤構築・維持・管理											■

凡例 ■ 主たる領域 ■ 従たる領域

【出典】経済産業省、「情報システムユーザースキル標準Ver.1.1」、2007年6月、p31

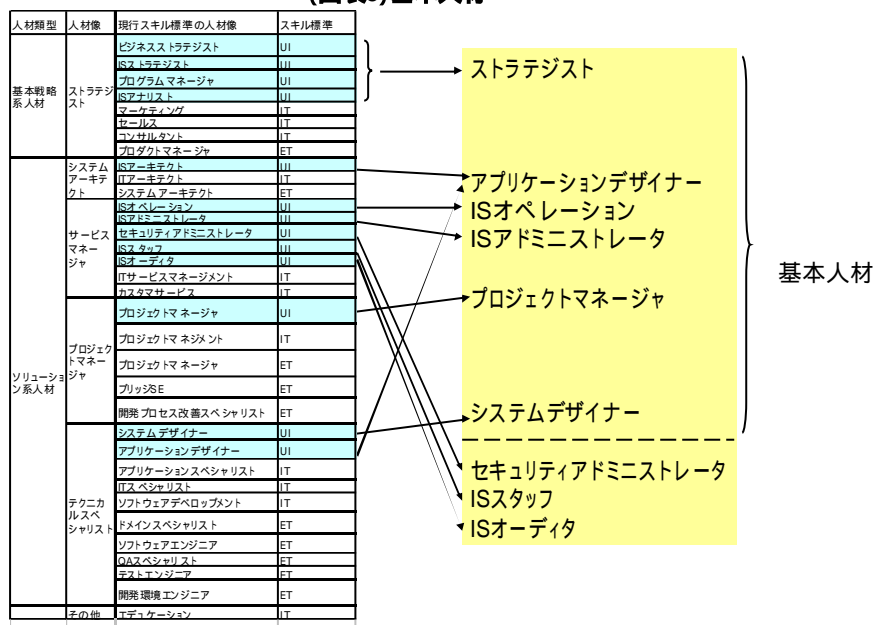
UISS には、「本スキル標準を適用する際には、人材像ありきではなく、自社にとっての組織の機能・役割の視点が基軸であることに留意が必要である。つまり本スキル標準が想

定しているのは、各企業独自の人材像として本スキル標準の人材像を取捨選択する、あるいは自社の人材像と組み合わせる、分割するといった活用である」と書かれている。

しかし、取捨選択、組み合わせるにしても、一人に求めるべき人材像としてのまとまりがなければテンプレートとして活用することはできない。ITSS も専門分野は 36 種類もあるが、職種は 11 種類にまとめられている。これにより、職種レベルで自社の人材像を検討したうえで、必要な部分を専門分野に細分化することが可能になっている。

ところが、UISS は人材像として 13 種類の人材像がフラットに定義されており、人材像間のまとまりがない(図表 3 参照)。これでは、人材像のテンプレートとしては使いにくい。そこで、産構審情報サービス・ソフトウェア小委員会の高度 IT 人材像を参考に、また、いままでお付き合いいただいた企業の情報システム部門の実態を考慮して、6 つの基本人材を考えてみた(図表 5 参照)。

(図表5)基本人材



高度IT人材(産構審 情報サービス・ソフトウェア小委員会)

戦略を考えるストラジスト、アプリケーション系人材のアプリケーションデザイナー、インフラ系人材のシステムデザイナー、プロジェクトを管理するプロジェクトマネージャ、運用系人材のISオペレーション、情報活用を促進する人材のISアドミニストレータの6つである。図表5で示すように、UISSのセキュリティアドミニストレータ、ISスタッフ、ISオーディタはこの6つの人材像の中に含まれないが、これらの人材像は必要に応じて追加していけばよい。どの情報システム部門にも欠かせない人材は、大きくこの6つの基本人材に集約できるのではないかと思う。基本人材とタスクの関連は図表6のようになる。

(図表6) 基本人材とタスクの関連

タスク \ 人材像	ストラテジスト	プロジェクトマネージャ	アプリケーションデザイナー	システムデザイナー	ISオペレーション	ISアドミニストレータ
事業戦略策定	主たる領域					
IS戦略策定	主たる領域					
IS戦略実行マネジメント	主たる領域					
プロジェクトマネジメント		主たる領域	従たる領域			
IS企画			主たる領域			
IS導入(アプリケーションコンポーネント)			主たる領域			
IS導入(システムコンポーネント)				主たる領域		
IS企画評価			主たる領域			
IS保守(アプリケーションコンポーネント)			主たる領域			
IS保守(システムコンポーネント)				主たる領域		
IS運用					主たる領域	
IS活用						主たる領域
IS戦略評価	主たる領域					
事業戦略評価	主たる領域					
IT基盤構築・維持・管理				主たる領域		

凡例  主たる領域  従たる領域

この基本人材を活用して、定義した機能・役割から必要な人材像を定義する。もちろん、UISS で書かれているように、基本人材がそのまますべての企業に適合するものではなく、取捨選択、組み合わせ、不足部分を補って定義する必要があることに変わりはない。

自社の必要な人材像が定義できたら、人材を育成するための道具である研修ロードマップを作成し、人材育成のための運用方法、自社内への展開方法、人材ポートフォリオの作成方法などを検討し決めていく必要がある。

これにより、UISS の二皿目の料理が完成する。

## 5 . UISS 料理は二皿すべてを食べることで有効となる

UISS 料理の一皿目だけでは、自社に必要な IS 機能役割を定義しただけであり、これを充足するための方策が考えられていない。UISS 料理の二皿目である自社に必要な IS 機能・役割を担う人材育成のしくみ作りまで行わないと、自社の IS 機能強化を図ることはできない。一皿目で満腹せずに、二皿目まで食べることによって、UISS は企業の力となる。